UDW10

特定非営利活動法人
都市デザインワークス 設立10周年記念誌

“共感・共有”のまちづくりに向けて、想いを編む、意志を結う――

まちの未来を描く Planning
まちを共に創る Community Design
まちを歩き想う Walking and Imagine

“共感・共有”のまちづくりに向けて、想いを編む、意志を結う――

都市デザインワークスのミッション

榊原　進　都市デザインワークス 代表理事　コミュニティデザイナー
佐藤 芳治　都市デザインワークス 代表理事

**研究の一環として大学院生という立場から、都市デザインのフィールドワークに取り組んだ榊原、佐藤。
そこでまちづくりの構造的な問題点と向き合うこととなった我々は、長らく行政と民間企業（事業者）に委ねられてきた都市開発に、
市民の想いと意志を反映させる社会システムの構築をめざし、2002年特定非営利活動法人・都市デザインワークスを設立。
都市デザインの専門知識と知見を礎に、市民・行政・事業者をつなぎ・結ぶ、試みと挑戦を積み重ねてきました。
我々の地道な取り組みはやがて関係組織の目に留まり、様々なプロジェクトに参画させていただくまでとなりました。
10年を迎えた今、見据えるのは長期的視座に立った都市計画、そして復興後のまちづくり。
住む人、訪れる人を惹きつけてやまないまちの真の魅力とはなにか、歳月とともに輝きを増す地域づくりに必要なものとは？
――答えは、机の上ではなく、まちの中にあると信じています。**

地域の主体=住民から隔たってしまったまちづくりの在り方。都市デザインを学ぶ私たちにできることとは？

“身土不二（しんどふじ）”という言葉があります。食に関心を持つ方なら一度は耳にされたことがあるかもしれません。人間の身体は、住んでいる場所の風土や環境と切り離せない密接な関係があるというもので、それぞれの土地に適応した旬の作物を食べるのが最も身体に好ましいという考えです。もとは仏教用語の身土不二（しんどふに）に由来しており、“身”（これまでの行為の結果）と、“土”（身がよりどころにしている環境）は、分かちがたく結びついている、という意味があるそうです。

身体が地産の豊かな稔りによってつくられるならば、私たちの精神は地域の環境から少なからぬ影響を受けて形成される…と考えることもできます。私たちは、まちの有り様の重要性について、もっと思いを致してみるべきなのかもしれません。

今から十数年前、我々は東北大学で大村先生（13ページのインタビューをお読みください）の教導の下、都市計画・デザインについての研鑽を積んでいました。机上から現場へ。街に飛び出し、その姿につぶさに触れ、息遣いに耳を澄ませるうちに、さまざまな課題と対峙せざるを得なくなりました。

まちは住む、働く、遊ぶなどの営みが綾なされる生活空間の中心です。そこには連なる時間と地続きの歴史と文化があり、まちの気風や特性は、その地に住まう人、また行き交う人たちが共有しながらつくりあげてきたものです。言うまでもなく“まち”という舞台の主人公は、市民です。

しかし、これまでまちづくりは主に行政と事業者の手に委ねられてきました。公平・平等を是とする行政主導の都市計画は、まち固有の歴史や風土、個性を生かすことを不得手としました。また、民間企業による都市開発は、事業性を優先するあまり、都市全体を俯瞰する視点や周辺住民・環境への配慮が行き届きませんでした。一方、計画に反対の気炎を上げる市民活動にも、明確な都市の将来像が存在しているとは言い難いケースが多く見受けられたのです。

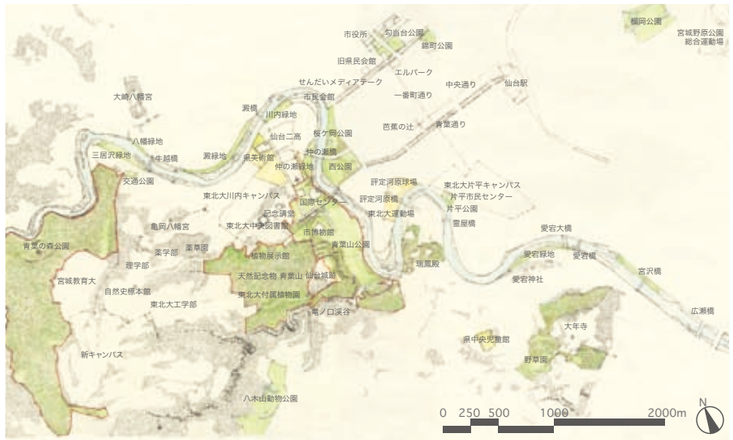
確かに、社会インフラの整備が急務とされた時代には、トップダウン型の都市開発が効果的であったかもしれません。しかしすでに時代は、量的拡大ではなく、精神的豊かさや生活の質の向上を重視する成熟社会という新しい局面を迎えていました。

まちづくりを担う組織が、個々の思惑と事情で計画を推進した結果、21世紀を迎えたばかりの日本には、種々の都市問題が顕在化していました。まちは市民の手から離れ、“身”と“土”は都市計画の名のもとに遠く隔たってしまったかにみえたのです。

こうした背景を受けて、まちと市民の有機的なつながりをもう一度取り戻そうという試みが胎動していました。しかし、前述の通り、行政と事業者はその役割期待と自己目的上、多様な要請に応えることは困難です。市民ニーズや活動をまちづくりに生かすための新しい社会システムの構築が求められていたのです。

都市計画＝まちづくりへの知見を礎に、市民・行政・事業者を架橋する役割を。2002年、都市デザインワークス誕生。

“市民が都市の将来像を共有し、自立・自律的にまちづくりに取り組むためにはどのような支援と仕組みが必要なのか”――我々の模索が始まりました。幸いにも、研究の一環として取り組んだ『ゲート・タウン八幡』（勝手連 仙臺まちづくり応援団）と『せんだいセントラルパーク』の２つのプロジェクトは、市民提案型まちづくりへの確かな手ごたえをもたらしてくれました。同時に、体感した可能性は、我々が担わなければという使命と責務を帯びたものだったのです。（※前述の2プロジェクトをとりまとめたガイドブックは、第4回日本都市計画家協会賞 特別賞を受賞）。



都心を流れる広瀬川を核とする『せんだいセントラルパーク』。

UDW事務所風景

住む人がまちに誇りと愛着を持ち、毎日を快適に暮らし、その活気と賑わいが訪れる人を惹きつける個性輝く地域づくり、豊かで多彩な魅力を次代へと“つなぐ”都市計画のために我々が果たせる役割は小さくないはず…… 2002年、特定非営利活動法人・都市デザインワークス（以下UDW）が新しい一歩を踏み出しました。急激な社会経済情勢の変化に呼応した都市機能の高度化ならびに都市の居住環境の向上を時代は希求していたのです。

UDWが高く掲げた理念は、市民と行政と事業者の間を架橋し、たくさんの思いをひとつに“編む”こと。都市計画に関する高度で幅広い専門知識と知見を基盤とし、長期的・持続的・総合的な視座のもと、まちの潜在した魅力を引き出しながら、将来像を具体的かつ明快に示していきます。それらを理解・共有する場、つまり市民・行政・事業者が共に地域のあるべき姿を探求する機会を設けながら、その実現に向けて関係組織と連携を取り、企画から計画、設計を行います。さらに実施～運営マネジメント～維持まで携わる一貫した都市デザインを実践していくのが、UDWのミッション。従来のまちづくりは、こうしたプロセスとの親和性が低かったため、当初は困難を伴いましたが、10年にわたる地道な取り組みを通じ、讃する声を多くいただくようになりました。一方通行のまちづくりではなく、市民・行政・事業者が協働・連携して、構築していく次代のまちづくり。今、都市デザインの新しい風が興っています。

一人ひとりの想いを、みんながわかちあう“地域の将来像”に編む。市民提案型のまちづくりを共に考える。

「どんなまちにしたいですか」という問いには、百人百様の青写真が描かれることでしょう。また「まちづくりに対して発言したい」と思っていても、近年は都市デザインが複雑・専門化しているため、行政や事業者が主催する意見交換会などへ参画することに敷居の高さを感じられる市民も少なくないはずです。UDWの役割は、一人ひとりの想いを、みんなが分かち合う“都市の将来像”としてまとめ、要望ではなく提案として編み上げること。我々は専門家として高みにたったスタンスではなく、あくまでも市民に寄り添い、興味・関心を喚起し、直感的・視覚的に理解いただける資料と論理的整合性を備えた提案の作成を支援しています。具体的には、地域の歴史や風土を学ぶための“素材”の提供や、まちの魅力を再発見するためのフィールドワークの実践、発想を促すワークショップの開催などを通じ、“住民力”を鍛えていきます。

仙台の魅力を再発見できる『杜の都ガイドツアー』

また行政側には、市民との円滑なコミュニケーションの形成と、地域ニーズを根底に据えた総合的な施策の計画立案をサポートしています。さらに事業者に向けては、歳月を重ねるほどに価値と美しさを増す“経年優化”するまちづくりを提案しています。都市計画を区切りのあるものとして捉えるのではなく、長い目で運営マネジメントしていく姿勢が前提条件となります。

市民・行政・企業（事業者）の各セクターから独立した中立・中間組織として活動を続けてきたUDW。そして今、次なる目標に掲げるのが、これからの10年、20年を見据えた都市計画、復興の先にあるまちづくりです。

そのひとつが設立以来、その構想を練り上げてきた『せんだいセントラルパーク』。人びとを魅了する世界の都市の多くは、市民の資産、そして観光資源としての『セントラルパーク』を擁しています。中でも最も有名なニューヨークのセントラルパークは、19世紀の半ば、20年の歳月を費やしてつくられました。

『せんだいセントラルパーク』は、杜の都を象徴する青葉山や広瀬川の一帯、自然と都市機能が融合する美しい地域を仙台のセントラルパークと位置づけ、市民の憩いの場、観光客をいざなう拠点としてまちづくりを進めていこうというものです。UDWの設立前夜から取り組んできたこのマスタープランは、地域一帯の歴史を紐解き、現状分析と可能性の考究、そして市民とのワークショップと対話を重ねて結い上げた、まさにUDWの原点ともいえるものです。そして今、次なるフェーズに向けたプロジェクトが始動しています。

私たちの身体と土地（地域、まち）は、切っても切り離せない関係にあります。どんな風景を抱き、どのような気韻の満ちるまちにしていきたいのか、その将来像をみなさまといっしょに考えていきたいと思います。

想いをカタチにする３つの柱

まちは、住む、働く、遊ぶなどの人の営みが重なり合う生活空間であり、歴史と文化を積み重ねながら、次代へ引き継いでいくもの です。一人ひとりの「こんなまちにしたい」という想いを集めて将来像を創り、市民・行政・事業者みんなで共有しながら実現を目指していきます。

次代につなぐ都市づくり ～まちの将来像を描く～

都市や地区の魅力を発見し引き出すことを大切にし、その魅力を高める将来像から具体的な事業計画まで、次代を見据えたコンサルティングを行います。

- ■都市づくりに関わるビジョンやマスタープランの提案、政策提言
- ■都市づくりや都市空間整備に関する調査研究・計画立案
- ■良好な都心居住に寄与する建築物の計画・設計
- ■計画の実現に向けた関係主体との連携・調整

市民と進める地域づくり ～まちを共に創る～

地域が主体となって進めるまちづくりを、行政と連携しながら支援します。
特に、住民同士の対話と合意形成プロセスを重視します。

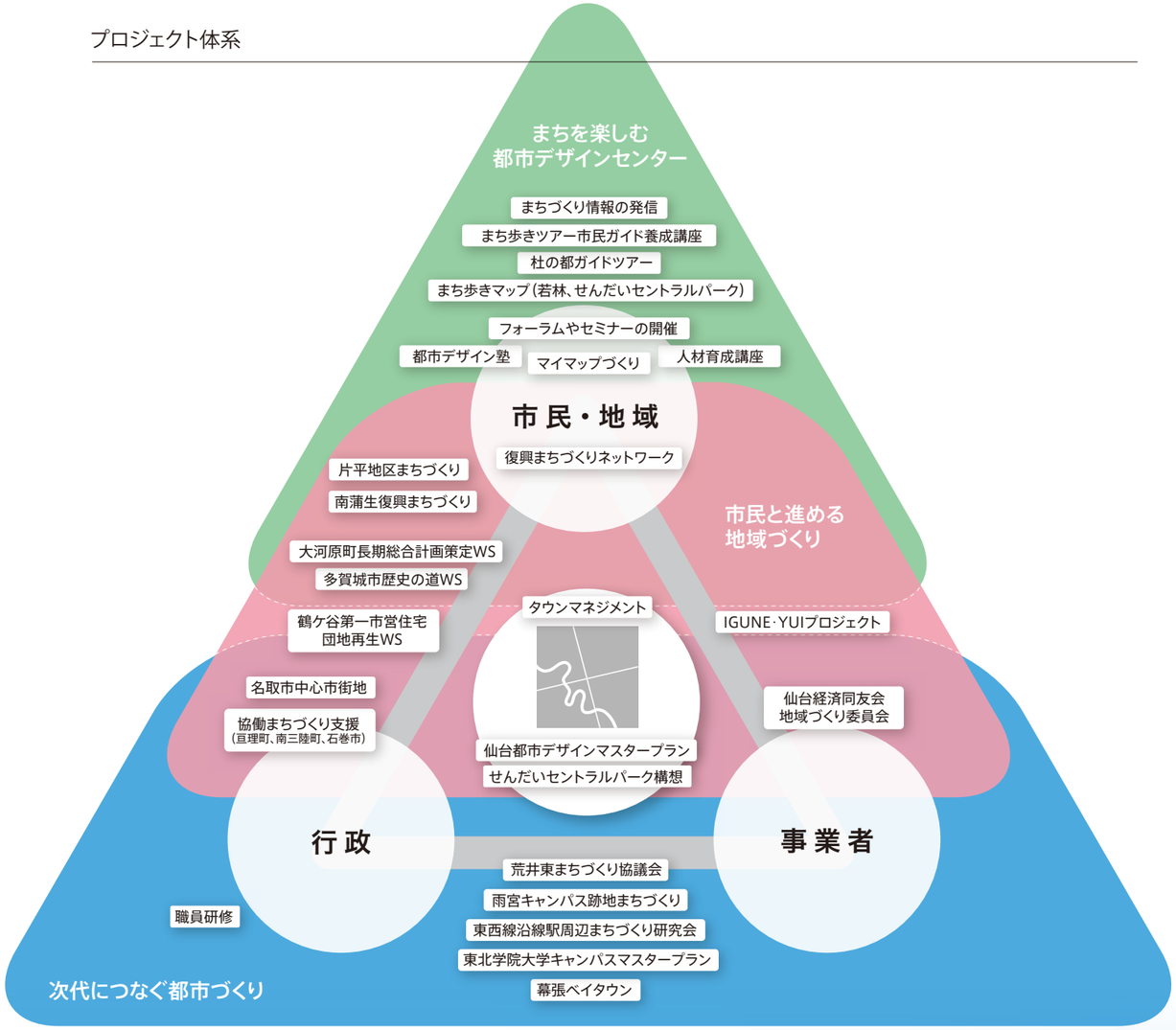
- ■住民がまちづくりを考える基礎となる地域情報の整理・提供
- ■まちづくりワークショップの企画・運営、成果の"見える化"
- ■地域まちづくり計画の策定
- ■持続的なまちづくりのためのタウンマネジメント

まちを楽しむ都市デザインセンター ～まちを歩き想う～

市民がまちを楽しんだり、まちづくりへの参加の場を提供します。

- ■まち歩きガイドツアーの企画・運営
- ■マイマップなどの市民参加プログラムの開発・提供
- ■まちづくり人材の育成
- ■ファシリテーターやまちづくりアドバイザーの派遣

プロジェクト体系



WS：ワークショップ

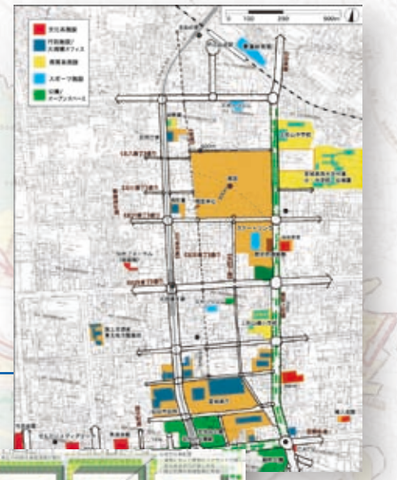
PLAN

まちの 未来を 描く

～次代につなぐ都市づくり～

■せんだいセントラルパーク構想(2002～) 【ホームページ　http://sendai-cp.net/】

仙台都心を流れる広瀬川流域を市民のための『せんだいセントラルパーク』として捉え直す構想で、都市デザインワークスの代表的なプロジェクトです。野趣に富む自然と歴史的な佇まいを保全し、公園やミュージアム、個性的なカフェやショップをめぐる魅力を高め、市民や観光客が多彩な楽しみ方をできるよう、官民協働により総合的に整備・運営すること提案しています。構想をまとめたガイドブックの出版、ガイドツアーや展示会、まち歩きのお伴となるマップや冊子を通じて、広く市民の共感の輪を広げています。現在は『せんだいセントラルパーク』を共に盛り上げていただく団体をサポートする基金の創設に取り組んでいます。



■雨宮キャンパス跡地まちづくり(2006～)

東北大学雨宮キャンパスから農学部が移転した跡地のまちづくりを検討するため、東北大学と仙台市、仙台商工会議所が合同で進める検討会議に資料を提供し、関係者が方向性を共有できるようサポートしてきました。9.3haもの広大な敷地を仙台の都心周辺部における次代の市街地モデルと位置づけ、周辺環境と調和する複合市街地のあり方を提案し、事業者ヒアリングなどを通じて土地利用転換の課題と解決手法を提示しました。

■幕張ベイタウン(2003～)

“住宅で街を創る”というコンセプトのもと千葉県が主導する幕張ベイタウンのH2街区およびSH2街区のマスタープラン、設計調整を行っています。デザインガイドラインを遵守しながら住宅事業者とボリューム配置などの検討を重ね、専門家のワークショップにより都市デザインの質を向上し、県の計画デザイン会議で承認されるまでの都市デザインを担当しました。また、実施設計の調整や外構の設計監修など具体的な建設まで都市デザインのコンセプトが継承されるよう監修を行っています。

■荒井東まちづくり(2011～)

地下鉄東西線の東のターミナル・荒井駅の南側で進行中の土地区画整理事業を基に、官民連携によるまちづくりにむけて地元と事業者で構成される『荒井東まちづくり協議会』の事務局として『まちづくり基本計画』の策定に携わっています。今後は、仙台東部の賑わい拠点づくり、低炭素なエコタウンづくり、豊かなコミュニティづくりなど基本方針の事業化を進めるとともに、まちの長期的な価値向上を目指すタウンマネジメントに取り組みます。

Interview 01

小島 博仁
仙台市都市整備局長

79年に東京理科大学建築学科を卒業後、仙台市役所入庁。
あすと長町地区の計画段階から携わり、都市計画、区画整理事業、まちづくりに通算13年関わる。その間、施行主体である住宅都市整備公団（現UR都市機構）に2年間出向。10年都市整備局次長、11年震災復興本部副本部長を経て、12年より現職。

市民参加型の合意形成のプロセスをUDWがサポート。

戦後復興期から高度経済成長、安定成長期に至るまで、インフラ（社会資本）整備を主眼に置いた“まちづくり”は長らく行政の手にあったといえます。何よりも迅速さと実効性を求められた時代にあって、行政主導は最も推進力と機動力を発揮できるシステムでした。しかし、本来まちづくりとは、市民との協働のなかで育み、稔らせるべきもの――それを痛感させられる出来事がありました。

現在、魅力的な商業施設が次々と整備されつつある『あすと長町』（仙台市太白区／長町駅に隣接する市街地）。最近も北欧の人気家具製造・販売大手が出店に向けた用地を取得したとの報道があり、耳目を集めました。『あすと長町』は、都心部を補完する役割を担う拠点として、昭和58（1983）年から再開発のための現況調査が始まりました。事業主体である仙台市とUR都市機構が、基本計画を練り上げ、住民説明会を実施したのは平成4（1992）年のこと。しかしこの時、地域の方々からは非常に強硬な反対意見が飛び出しました。これは“わが街への想いを共有する”といった合意形成のプロセスが欠如していたために他なりません。市民と同じ目線、同じ立ち位置から考えるまちづくり、そして共に考察し、計画するまちの未来……理念と方向性は理解できますが、行政ー市民間で議論を構築していくのは、難しい面がありました。そこで都市計画の専門家である大村虔一先生（当時東北大学建築学科）にご協力を要請しました。多種多様な意見を整理し集約していくための仕組みや技術（ワークショップやそれを進行させるファシリテート）は、非常に高度に機能していたように思います。これらの取り組みにより、市民の方々の発言力や自ら動く姿勢といったものも醸成されていったように思います。都市デザインワークス（以下UDW）の榊原さん、佐藤さんは、当時、大村研究室に所属されている学生でした。

そうして平成14（2002）年4月、市民協働のまちづくりの実現に向け、市民の意見を盛り込んだ『あすと長町まちづくり基本方針（仙台市）』が公表されました。奇しくもそれから4か月後、UDWが設立の運びとなったようですね。10周年に寄せて、心からお慶び申し上げます。

変容する社会環境下のまちづくり、市民協働が核に。

私たちは今、“復興に向けたまちづくり”という、やり遂げなければならない課題と対峙しています。復興への前提条件として被災した方々の気持ちに寄り添うこと、が挙げられますが、平時のまちづくりに加えて難しいデリケートな側面があることはいうまでもありません。現在、UDWには、仙台市宮城野区南蒲生地区の復興まちづくり計画策定をサポートしていただいています。

この度の震災におけるNPOの活躍は目覚ましく、存在意義を広く周知することにもつながったのではないでしょうか。市民協働に向けた、行政とNPOとの協調連携はこれからますます加速していくのではないかという感を強くしていますし、それをスムースにするための仕組みづくりも急務といえるでしょう。

少し悲観的な言葉を並べますが、これから日本は世界でも例を見ない少子高齢化社会へと突入します。経済成長見通しに関しても、専門家のネガティブな意見が目立ちます。私たちは変容を遂げる社会環境下での都市計画やまちづくりに取り組んでいかなければなりませんが、そこには“教科書（先例）”がなく、ケーススタディ（事例研究）を行うこともできません。しかしそれでも最適解を導き出さなくてはなりません。たとえ厳しい価値転換を伴うタフな道のりになろうとも、市民とともに手を携えて、未来と向かい合う――それが私たちの使命であり責務です。

まちを 共に 創る

～市民と進める地域づくり～

COMMUNITY DESIGN

Mizusawa

新小谷木橋デザイン検討ワークショップ（2012~）

岩手県奥州市水沢区に新しく架け替える橋のデザインについて、近隣地域の中学生と町内会が参加するワークショップの企画・運営を行っています。　ワークショップでは、バルコニーや橋詰広場の使い方等について利用者目線からの意見・提案を引き出すため、橋の実寸体験や模型などを活用しアイデアの出やすい仕掛けと楽しい雰囲気づくりを心がけています。そこで出たアイデアを専門家として整理したうえで、景観デザインを担当するコンサルタントへ引き継ぎ、設計に反映されています。

katahira

片平地区まちづくり（2010~）

仙台の片平地区（約5千世帯）では、地区全体で取り組むため、連合町内会を母体に各種地域組織や市民センター、小学校が参加する『片平地区まちづくり会』を立ち上げました。市が派遣するまちづくりコンサルタントとして、会の設立と運営方法をアドバイスするとともに、まちづくり計画の策定をサポートしています。計画づくりの過程で浮き彫りになった課題について、助成金を獲得しつつ様々なNPOと連携した実践活動に取り組むなど、住民主体のまちづくりの好例となっています。

Minami-Gamo

Ohgawara

南蒲生復興まちづくり（2012~）

南蒲生地区は、仙台東部の集落（約240世帯）で、東日本大震災の甚大な津波被害を受けました。災害危険区域の線引きに翻弄され、同じ町内会に、防災集団移転事業で移転する住民、区域外では現地再建と移転希望の住民の“三者三様”の状況です。仙台市からの委託を受け、地域と市の“つなぎ役”を担っています。まずは地区内で具体的な協議を行う『復興部』を創設し、その結果を町内会の総意として市に提案する体制を整えました。毎週開催される復興部会議やワークショップ、全世帯アンケートを通じ、南蒲生の魅力や復興に向けた課題を整理し、将来像と具体の方策を描く『南蒲生復興計画』策定を支援しています。

第五次大河原町長期総合計画策定ワークショップ（2009~2010）

総合計画の策定に際して地域住民と役場職員が一緒に議論する『コラボ会議』のワークショップの企画と運営を担当しました。テーマごとに5つのグループに分かれ内容を掘り下げ、最終的にそれぞれの重点政策を町長に提案し、長期総合計画にも位置づけられました。

Interview 02

今野 均
片平地区まちづくり会
委員長

及川 俊
元インターン生
現：岩手日報社 編集局 報道部勤務

先駆的まちづくりと、UDW“地域愛”とのコラボレーション

60歳の定年を機に、はじめて町内会の役員なるものを仰せつかりました。これまであまり目を向けてこなかった“我がまち”と対峙することにより、実は多くの問題を内包していることに気付かされました。喫緊の課題とされていたのが、高層マンションの建設計画。構造計算書偽造問題が世間の耳目を集めていたこともあり、建築主からの説明を受け、確認書を取り交わしました。その後、『まちなか農園藤坂』の立ち上げ・運営、『片平地区平成風土記』の編纂など、おかげさまで地域づくりの好例として各方面からご注目いただけるまでとなりました。学校関係者やNPOの諸団体との連携は、地域や世代を超えた交流としても高度に機能しています。現在片平地区では目標として①安心・安全確保、②コミュニティ活性化、③歴史・環境保全の3つの柱を掲げて活動をしています。

都市デザインワークス（以下UDW）との出会いは2009年。街の現況を分かりやすく示した資料の提供やワークショップなどを通じ、まちの課題の抽出・共有、新しい個性・魅力の探究などをサポートしていただいています。まちづくりの議論は、時として衝突を生みかねませんから、第三者的な存在は重要な位置を占めます。行政側への働きかけも、私たちだけではハードルが高いもののひとつ。“地域愛”にあふれるUDWの多面的かつ心強い力添えは、私たちのまちづくりに欠くべからざるものです。今後ともよろしくお願いいたします。

机上の学びから現場へ。UDWでの得難い体験は、一生の財産に。

大学3年生の時、仙台市が主催する『平成22年度 学生とNPO等を結びあわせるインターンシップ推進モデル事業』に応募し、都市デザインワークス（以下UDW）での就業体験の機会を得ました。私は都市社会学を専攻していましたが、座学だけではなく、実地での見聞を通じて、専門領域の研鑽を深めていきたいと思っていました。

中でも片平地区での研修は、多くの新鮮な驚きの連続でした。例えば大学でのワークショップは、学生というほぼ同質な属性が集まる演習ですが、まちづくりの合意形成の“場”としてのワークショップは、もっと切実なリアリティを持つものであり、様々な背景を持つ、幅広い年齢層の方々の意見を拝聴することができました。それはまさに生活者の“息遣い”といえるものでした。またUDWでは、東日本大震災の折、コミュニティがどう機能・機動したか追跡・ヒアリング調査に取り組み、その結果に検証と評価を加えています。私もそのフィールドワークに同行させていただきましたが、非常時のまちの有り様について深く考察する好機となりました。

インターンシップでの取り組みをまとめた卒業論文は、所属研究室内で優秀賞をいただきました。また立場や年齢も多様な方々との交流は、昨今若者に欠如しているといわれるコミュニケーション力の涵養にも非常に役立ったと実感しています。もちろん今の仕事（新聞社勤務）にもつながっています。

芳賀 正
南蒲生町内会 復興部 部長

地域住民が想いをひとつに、復興に向けたまちづくり

震災から1年半。言葉も出ない茫然自失の状況からなんとか立ち上がり、無我夢中でこれまでの日々を駆け抜けてきました。避難所から仮設住宅に移れたのは2011年6月。仮住まいとはいえ、自分の居場所を確保できたことから、少しずつ気持ちも落ち着き、“これから”のことを考える余裕が出てきました。前向きな情報交換の機会も増え、7月には自治会が発足。“復興”の二文字も頻出し、「私たちの町をなんとかしなくてはならない」という共通認識が芽生えたものの、話し合う場、また具体的なプロセスをどう構築していったらよいのか、五里霧中の状況でした。

2011年12に、まちづくりのコンサルタントとして市からご紹介いただいたのが都市デザインワークスです。2012年1月の『復興部』立ち上げ以降、毎週1回ミーティングの機会を設け、専門家の立場からのアドバイスを受けつつ、話し合いを進めてきました。初めは時間をかけてディスカッションしていく過程に抵抗がある地域住民の方もいらっしゃいましたが、回を重ねるうちに理解・納得していただけるようになりました。やっと全体像を描くまでにこぎつけ、いよいよ次のステップへと歩を進めることになりました。

甚大な自然災害によって揺さぶられ断たれてしまったコミュニティの姿。それを再び結い合わせるべく、私たちの試行錯誤は続いています。まだまだ道半ばの地域の復興――これからもみなさまのご支援をよろしくお願いいたします。

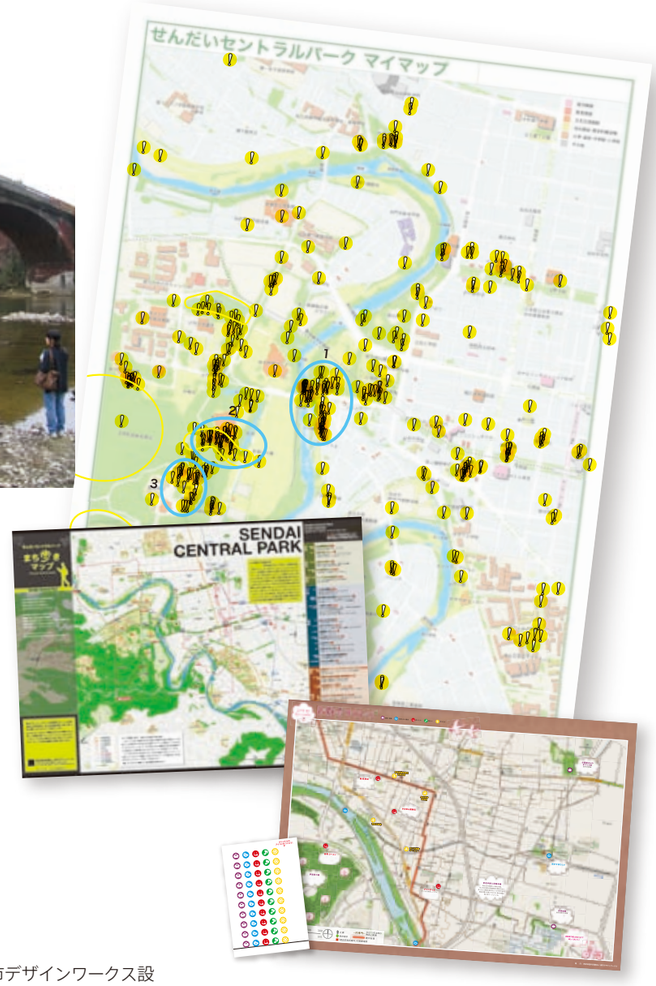
WALKING and IMAGINE

まちを 歩き 想う

～まちを楽しむ都市デザインセンター～

■杜の都ガイドツアー

様々なプロジェクトを通じて、奥深さがわかってきた仙台の魅力を私たちだけで留めておくのはもったいない！と、ガイドと共に巡遊するまち歩きツアー企画・実施しています。見慣れた風景に潜む歴史遺産や景観資源など、普段の生活では見過ごしがちな「杜の都」の魅力を、写真や地図などのパネルを使って専門ガイドが案内します。もちろん、隠れた名店の立ち寄りランチも楽しみの一つ。お陰様で、大変好評いただいています。今後は、市民ガイドの養成やツアーコースの公募など、多くの方が参加して運営する仕組みづくりに取り組みます。



■マイマップ作り／まちあるきマップ

マップは、まち歩きに欠かせない道しるべ。マップを手に巡ったコースを振り返り、眺めの良い場所、新たな発見などのアイコンシールを貼り、オリジナルの“マイマップ”をつくります。完成した“マイマップ”は、参加者が知人や友人をガイドするマップになります。いくつも重ねることで、市民が感じるまちの魅力や課題を分析する資料にもなります。

また、ガイドツアーやワークショップを通じて集めた情報を盛り込んだ２つのまち歩きマップを作成。地域のショップでも販売していただいています。

■都市デザインセンター

市民が気軽に立ち寄ってまちづくりの情報を収集したり、相談できる「都市デザインセンター」をつくるのが都市デザインワークス設立以来の目標です。2005 年に、広瀬川を眼下に望む仙台市民会館ロビーで、期間限定の都市デザインセンターを開設し、模型やパネルの展示、まち歩きの発着、シンポジウムの開催など、市民から観光客まで多くの方に来場していただきました。

都市デザインセンターとは…

大きな街の模型が置かれ、街並みづくりが検討されるなど、まちづくりの進捗を見ることができます。

- 街の将来計画図やスケッチなどでこれからの都市デザインを知ることができます。
- 専門スタッフにまちづくりのアドバイスを受けることができます。
- 各国、各地の都市デザインに関する本や図面、データが整理されています。
- 地元食材にこだわったカフェがあり、くつろぎながら「まちあわせ」ができます。
- 様々なテーマのセミナーやワークショップが開かれます。

Interview 03

紅邑 晶子

せんだい・みやぎNPOセンター 代表理事

テレビの制作会社勤務を経て、コピーライターとなり広告制作会社に勤務。フリーになった後、広告制作に関わることへの疑問からNPOに興味を持ち、「市民活動地域支援システム研究会」「仙台NPO研究会」に参加。1997年11月には「せんだい・みやぎＮＰＯセンター」設立に参加。「せんだいCARES」「CSRセミナー」「CSR推進相談所」等、企業・NPO・行政をつなぎ、地域における交流の場の提供や地域の活性化に尽力している。2011年3月より「みやぎ連携復興センター」を立ち上げ代表を務めている。

民と官のインターフェイスを目指した先進的チャレンジ

設立10周年おめでとうございます。”十年ひと昔”といいますが、まちの姿だけではなく、まちづくりを取り巻く情景も大きく様変わりしてきているようにみえます。地域開発における民と官のインターフェイスに挑んでこられた都市デザインワークス（以下UDW）の来し方は、この10年で発展・拡大を遂げた市民参加のまちづくりをけん引する歩みであったといえるのではないでしょうか。

長らくまちづくりは、都市計画の名のもとに自治体（行政）の権限に属することだと考えられてきました。私もかつて仙台都市総合研究機構（仙台市シンクタンク、2007年3月廃止）の市民研究員や、仙台市都市計画審議会の市民委員として、まちづくりに関わりましたが、残念ながら広く一般に“開かれた”取り組みであるとは感じられませんでした。事業概要の説明ひとつとっても、専門家だけに通じる用語が頭上を飛び越えているという印象を持ったものです。これでは到底“わかりやすい発信”とは言い難く、市民との間の議論の前提をも形成できません。一方、地域住民の側も、本来自分たちのものである“まち”の将来像を自主・自律的に描いていくという意識がまだ成熟しておらず、当事者としての姿勢に欠ける部分があったことも否めませんでした。しかし、まちづくりを“私”から“公”の問題として捉え、社会とつながりつつ、自分たちで解決していこうという気運が高まっていたのも事実。ちょうど市民活動が躍進していく過渡期に誕生したUDWは、理念を実践に結びつけていくのが難しい時期を経なければならなかったのではないでしょうか。

震災後のまちづくりを“新たな公共”の視点から

まちづくりを担う組織としてよく知られているものに、米国のCDC（Community Development Corporations）があります。CDCは地域住民を中心に構成され、個人の利害や損得ではなく、コミュニティ全体の利益を目指して活動し、地域に対して責任の一端を負っています。CDCには地域開発に精通している専門家も参画しており、まちづくりのための様々な情報、技術、資金調達のための方法をアドバイスしています。このようにエキスパートの知見と能力を取り入れることで、市民の力だけでは叶えられなかった地域開発を実現させています。

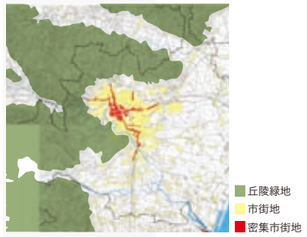
UDWの役割は、いうなればCDCの専門家に当たりますが、地域住民の想いや考えをまちづくりに反映させるための支援（例えば地域を学ぶための歴史や文化、環境、地形などの資料の提供や、多様な意見を交換するワークショップの開催など）に精力的に取り組んでおられるのを拝見すると、まちづくりの“導き役”としての役割を果たしているようにみえます。地域の方々に寄り添いながら“市民力”の育みを力強くサポートしているという意味では、NPOという組織の特性が生かされているようです。そもそもNPOはNon Profit Organizationの頭文字なのですが、近年ではNew Public Organization、つまり“新たな公共”の担い手として、市民の側からの提案型社会をつくっていきましょうという動きが顕著です。その背景には、市民意識の変化も含まれているでしょう。

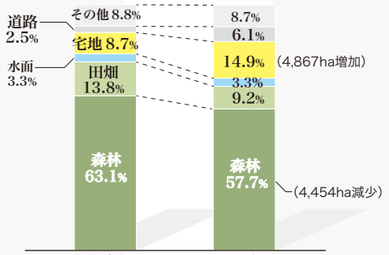
昨年の東日本大震災は、多くの課題や問いを私たちに残しました。災害時におけるまちの対応力や機動性に関しても、地域によって大きな格差が生じていたことは記憶に新しいところです。今、市民の“我がまち”に寄せる意識はこれまでになく高まっています。防災・減災のまちづくり、誰もが住みやすく誇りが抱けるまち、そしてコミュニティの紐帯を結びなおす取り組みに向けて、UDWの役割はますます大きくなっていくことと思われます。ご活躍を大いに期待しています。

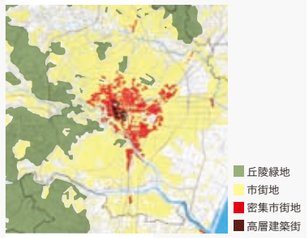
仙台の過去・今・未来

項目 ＼ 年	1970	75	1980	85	1990	95	2000	05	2010	15	2020	25	2030
キーワード	モータリゼーションの進展／市街地の拡大による緑の減少					都心の居住環境と街並みの悪化			コンパクトシティ	仙台都心4つの核		市街地と緑地の融合	
	市民の足となる市電					道路渋滞／環境問題				震災復興まちづくり	エコタウン・スマートタウン		

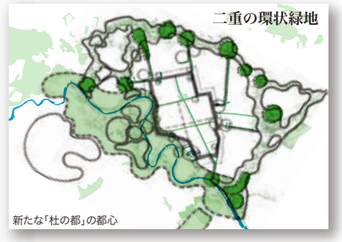
市街地







主な宅地造成
- '57~65 旭ケ丘団地
- '62~85 南光台団地
- '65~71 桜ケ丘団地
- '67~70 鶴ヶ谷団地
- '77~81 加茂団地
- '84~88 国見ケ丘
- '78~83 虹の丘団地
- '87~95 グランヒル明石台
- '72~99 泉パークタウン



コンパクトな街と自然や緑地にもそれぞれ魅力を持たせ次代の「杜の都」を創っていく

人口※3

(人)

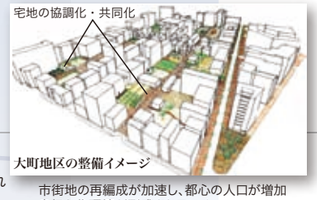
1,000千

'70 190,022人 (総人口の31.7%)
'75 177,588人 (総人口の25.1%)
'80 171,535人 (総人口の21.7%)
'85 162,958人 (総人口の19.0%)
'90 157,368人 (総人口の17.3%)
'95 147,908人 (総人口の15.2%)
'00 143,787人 (総人口の14.3%)
'02 144,219人 (総人口の14.6%※5)
'05 160,409人 (総人口の15.6%※4)
'05 169,986人 (総人口の16.3%※4)

旧城下町エリアの人口推移

856千人 (7.3%)
912千人 (8.8%)
971千人 (10.8%)
1,008千人 (13.8%)
1,025千人 (15.8%)
1,045千人 (18.2%)
1,032千人 (22.4%)
1,022千人 (25.2%)
1,003千人 (27.0%)
976千人 (28.8%)

仙台の都心回帰が進む中、旧城下町エリアは大震災の被害は比較的少なく、復興需要及び避難者の居住地として都心の人口は増加し、市全体で2012年9月には106万人を超えた。(住民基本台帳)



市街地の再編成が加速し、都心の人口が増加
良好な住環境が形成されていく

800千

交通

公共交通機関乗車人員(1日平均)

'70 400,383人
709千人 (5.6%)
790千人 (6.3%)
599千人 (5.2%)

'73~ 東北自動車道
'82~ 東北新幹線開業
'83 西道路開通
'76 市電廃止

'78 209,403台
'85 315,266台
'80 218,269台
'90 414,415台
'95 503,479台
'00 570,040台
'00 517,289人
'05 593,288台
'05 494,260人
'10 595,831台
'10 477,536人

自動車保有台数

都心にマンションが増え始める

都心の公共交通手段
- ○バス ○LRT※2
- ○カーシェアリング
- ○鉄道への自転車の乗り入れ

'87 地下鉄南北線開業(八乙女~富沢)
'92 地下鉄南北線泉中央駅まで延伸
'00 仙石線地下新線開業
'99パークアンドライド(長町南にて開始)
'99るーぷる仙台
'02 100円バッ区開始
'07 仙台空港アクセス線開通
'10 富谷JCT開通、環状自動車道網完成
'12 北山トンネル開通
'15 地下鉄東西線開業

600千

商業・まちづくり

'72 仙台十字屋 '75 仙台フォーラス
'87 141ビル
'86 サンモール完成 '92 クリスロード完成
'87 マーブルロードおおまち完成 '93 ハピナ名掛丁／ぷらんどーむ完成
'88 ダイエー泉店
'97 ヨドバシカメラ仙台
'98 AER
'97 ジャスコ仙台中山／ザ・モール仙台長町
'99 S ELVA
'03 イオン仙台幸町ショッピングセンター
'03 仙台ロフト
'08 仙台パルコ
'10 仙台トラストタワー
'11 仙台アンパンマンミュージアム
'08 仙台港と泉PTにアウトレットモール
仙台駅周辺整備
地下鉄東西線沿線まちづくり
せんだいセントラルパークの整備が進む

総人口 総人口(高齢化率)
ピークは2015年で、その後減少していく。

400千

主な出来事

生産年齢人口
2005年でピークを迎え、その後減少。

'87 宮城町を編入
'88 泉市・秋保町を編入
'89 政令指定都市に移行(4月1日)
'99人口100万人達成(5月11日)
'00 せんだいセントラルパーク構想発表
'02 NPO法人 都市デザインワークス設立
'04 仙台都市デザインマスタープラン2004発表
'73 杜の都の環境をつくる条例
'74 広瀬川の清流を守る条例
'86 スパイクタイヤ対策条例
'95 杜の都の風土を育む景観条例制定
'97 仙台市景観基本計画
'98定禅寺通りが景観形成地区に指定される
'00 杜の都仙台市中心市街地活性化基本計画
'11 仙台市総合計画2020
'11 仙台市震災復興基本計画
各地で市民提案型まちづくりが実践される!?

ケヤキが植えられた頃(昭和30年代初め)の定禅寺通
出典：仙台市戦災復興記念館

200千

'71 仙台新港開港
'78 宮城県沖地震
'90 仙台空港国際定期便就航
'01 せんだいメディアテーク開館
'03 仙台城跡が国史跡指定
'03 定禅寺通にてオープンカフェ実施
'08 仙台市新天文台
'86 SENDAI光のページェント開始
'91 定禅寺ストリートジャズフェスティバル開始
'97 定禅寺ストリート「杜の都のアート展」開催
'09 奥山市長就任
'94 ベガルタ仙台発足(旧ブランメル仙台)
'04 東北楽天イーグルス
仙台都市デザインセンター設立!?

年少人口
すでに1985年にピークを過ぎ、現在は減少中。

老年人口 年々増加し、2005年には年少人口を上回る。

現在の定禅寺通

0

社会的背景

'73 第1次オイルショック シルバーシート登場
'79 第2次オイルショック
'74 コンビニ1号店開店
'70 初任給(大卒)40,961円
'78 インベーダーゲーム
'83 ファミリーコンピュータ発売
'89 バブル
'90 株価暴落
'92 地価下落
'89 消費税導入
'95 阪神淡路大震災
'96 携帯電話が飛躍的に普及
'97 消費税5%に
'98 NPO法
'97 初任給(大卒) 200,061円
'02 FIFAワールドカップ
'02 構造改革特別区域法
'02 都市再生特別措置法
'04 景観法
'08 岩手宮城内陸地震
'08 リーマンショック
'09 政権交代
'11 平泉世界遺産登録
●'11 東日本大震災
国際的な都市間競争の激化

※1:1988年以前の仙台市のデータは、泉市・宮城町・秋保町を含めた現在の市域の値を示す。
※2:Light Rail Transitの略で、新しい路面電車のこと。騒音が少ない、低床式で乗り降りがしやすいといった特徴がある。
※3:~'95 国勢調査／'00~ 国立社会保障・人口問題研究所小地域簡易将来人口推計システムより
※4:2002(平成14)年の住民基本台帳の仙台市の総人口を用いて算出した。

可能性を“実現する力”に。UDW百年の計。

大村 虔一
アーバンデザイナー

東北大学建築学科を卒業後、東京大学都市工学科助手を経て、昭和43年に（株）都市計画設計研究所を設立。以来、東京オペラシティや幕張ベイタウンなど日本を先導する都市・地域開発を手懸ける。平成7年に東北大学教授として仙台に戻ってからは宮城をはじめ東北各地のまちづくりに尽力している。また、「プレーパーク（冒険遊び場）」を日本で作り、広めてきた「生みの親」として日本冒険遊び場づくり協会の代表なども務める。

行政-市民、双方向の取り組みを支援するNPOたれ。

私が大学の教授職にあった時の教え子――いわば愛弟子榊原君、（佐藤）芳治君がまちづくりの仕事に携わりたいと相談にきたのが10年前。“薫陶よろしきを得て”、そのような志向性と決意が醸成されたのであれば、指南役としてこれほどの喜びはないと感じたことを思い出します。

その際、私は『NPO』として組織することをアドバイスしました。これは東京で都市設計という業務の確立と大規模再開発などを手掛けてきた者として、将来を見据えたときの最適解でした。それまで都市計画では、公共側の発想によるハード面が先行し、地域住民を始めとする“人びと”のまちづくりへの想いが尊重されずにきたと思います。私は、多くの課題や障壁と対峙する取り組みを通じて、今後の都市計画やまちづくりは、民間企業ではなく、もっとフレキシブルで自由な発想・行動が可能な組織が担うべきであると思っていました。もちろん背景には専門的な知識・知見が必須です。そういう意味では、都市計画の専門課程を修め、若き感性と意欲を備える榊原・佐藤両君は適任であり、NPOとしてまちづくりの新しい地平を拓いてほしいと大きな期待を寄せました。

彼らに担ってほしいと考えたのは大きく二つ。一つは、行政の計画立案をわかりやすい言葉に“翻訳”をし、情報発信していくインタープリターとしての役割。“お役所言葉”に代表される迂遠かつ難解な表現を、一般市民の方にも理解・納得しやすいものにしていくことです。これにより齟齬を最小限にし、議論の前提条件である共通認識を持つことができます。

二つ目は、まちづくりに向けた“市民力”をブラッシュアップすること。そこに集い住まう良さを見出し、“我がまち”がどうあるべきか自らのビジョンをとりまとめるためのお手伝い、そしてプランを提案し説得する力を磨くためのサポートです。市民が声を上げるだけではなく、理論的かつ科学的な議論に耐える力を備えることも、自発・自律的なまちづくりに不可欠です。

発展途上の我が国のまちづくり、UDWの活躍に期待！

都市デザインワークスの、文字通り10年間の“ワークス”をレビューすれば、種まきができた分野、大きな成果を手にできたプロジェクト、そして思うように活動できていない領域など、評価はさまざまな色彩を帯びることになるでしょう。彼らの努力如何にかかわらず、社会情勢や社会システムに起因する部分も大きいように思います。欧米諸国と比較しても、NPOの活躍の舞台はまだ閉ざされている印象を抱いています。同じ志を持つ仲間を一人でも多く招き入れて、少しでも大きな母集団にしていく必要があるでしょう。

我が国における行政ー市民協働の都市計画を難しくしているファクターのひとつに“市民教育”の欠如または不足があると考えています。欧州の多くの国や地域では、小学校からタックスペイヤーとして市民教育がなされています。また古くから続く基礎自治体（自治体の最小単位、数十万人から数百人まで規模は様々）を大切にし、政治や行政にかかわることが市民の責務と考えられています。地域の飲食店に集い、雑談しつつ、より良い地域づくりについてみんなで意見を交換するという日常のゆるやかなコミュニケーションも奏功していると思われます。社会構成員としての自覚と責任が、まちづくりを推進する力となっているのです。

まだまだ発展途上の我が国のまちづくり。その“のびしろ”の分だけ、都市デザインワークスの今後の活躍のフィールドが広がっています。その成長が楽しみです。

刊行物

都市デザインガイドブック せんだいセントラルパーク2006

市民提案型のまちづくりを創発する都市デザインワークスの代表的プロジェクト『せんだいセントラルパーク』の提案をもとに、地域の個性を丁寧に読み解き（2004年）、地域の人々の思いを引き出し（2005年）、将来像を描き提案する（2006年）など、都市デザインの初動期の実践手法をまとめました。

A4版横 オールカラー 88P
発行日：2006/7/26
価　格：2,000円（消費税込）

仙台都市デザインマスタープラン2004

都市デザインワークス設立と平行して進めてきた30年後の『杜の都』にむけた都市デザインの初動期（街の基本情報を把握しビジュアルに表現することで市民の理解を得る。その基本認識の上に将来像の提案を行い、議論のたたき台としながら共有していく。）をまとめた書籍です。都市づくりキーワードの解説コラムや専門家を招いて行った3回のシンポジウムの講演録も掲載されています。

A4版66P
発行日：2004/9/10

若林おさんぽマイマップ

奥州街道沿いに歴史を感じる建物が並び、昔ながらの町名が残る若林のまち歩きにぴったりな丈夫なマップを創りました。
マップ片手にまちを歩いて気に入った所には付属のアイコンシールを貼って、自分だけのオリジナルマップを作ろう！

A2版　両面フルカラー
発行日：2009/3月
価　格：400円（マップ、シール、クリアホルダーのセット。消費税込）

せんだいセントラルパーク　まち歩きマップ

仙台都心を流れる広瀬川流域は、都市と自然が交じり合い、多彩な“楽しみ”に出会える、市民のための「せんだいセントラルパーク」。その魅力を「まち歩きマップ」に凝縮してみました！！
広瀬川沿いの遊歩道やオススメスポットや、四季折々のお祭りやイベントを紹介しています。まち歩きのお伴に、いかがですか？

A2版　両面フルカラー
発行日：2011/5/25
価　格：200円（消費税込）

せんだいセントラルパーク　GUIDE 1　景観編

仙台のアイデンティティといえるこのエリアの景観はどのように構成されているのか。青葉山や広瀬川を眺めれる場所はどこなのか。ここでしか見られない景観について、地図や写真で分かり易くまとめています。

A4版8P
発行日：2005/1/30

せんだいセントラルパーク　GUIDE 2　歴史編

伊達政宗によって1601年に創られた城下町仙台。その藩政時代を中心に、数百万年前から近代まで、このエリアにまつわる歴史を凝縮しました。

A4版8P
発行日：2005/5/31

特定非営利活動法人
都市デザインワークス
〒980-0802　宮城県仙台市青葉区二日町 6-6-903
TEL. 022-264-2405　FAX. 022-796-0080
E-mail. info@udworks.net

ロゴマークの由来

縦の線は奥州街道
横の線は大町
交わるところが「芭蕉の辻」
そして流れる曲線は広瀬川。
これが仙台のまちの礎です。
この魅力をどれだけ育むことができるか、が私たちのチャレンジです。

名称	特定非営利活動法人 都市デザインワークス	事務所所在地	仙台市青葉区二日町 6 番 6-903 号　〒980-0802
英語表記	Urban Design Works, N.P.O.	連絡番号	022-264-2405
略称	UDW	設立年月日	2002. 8 .16（NPO 法人認証［宮城県］2002.8.15）

発行：2012 年 9 月